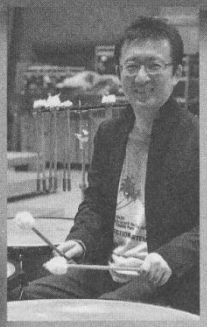
演奏に役立つ One Point Lesson

PERCUSSION パーカッション

今月は「マーチの中のスネアとシンバル」の話

安藤芳広 あんどう・よしひろ



◆出身　都立豊多摩高校、東京芸術大学
◆所属　東京都交響楽団、武蔵野音楽大学、なにわ《オーケストラル》ウィンズ
◆趣味　食べる、読む、飲む、歩く
◆血液型　A型
◆星座　ふたご座
◆読者にひとこと　落ち着いて！　でも進んでいこう
◆手紙の送り先　BJ気付

■スネアドラムの心得

マーチの中でのスネアの役割は、そう、おもに「裏拍担当」。で、その裏拍を一緒に担当するのは主としてホルンセクションだ。

となれば、バスドラムの役割がテューバやコントラバスのサウンドを意識して彼らを支えつつリードするのと同じように、スネアの役割は、ホルンを相棒にして音程感のあるハーモニーを聞かせながら、裏拍のリズムの大事なニュアンスをマーチのサウンドに加える、という大事なものとなる。

もちろん「音程感のあるハーモニーを聞かせる」というのは、スネアで音程を出そうという意味ではなく、「ハーモニーとなって裏拍のリズムを進行させていくホルンをつぶさないようなサウンドを目ざす」という意味。で、これが難しいのは、「ホルンのハーモニーをつぶさない」というのが、単に「邪魔しない」だけではダメというところ（これはイコール「それではいる意味がない」となる）。

なわけで……、マーチの中でスネアに求められるサウンドは、ホルンのハーモニーをつぶさず、かつ「そのハーモニーを活かしながら」、加えて「ホルンの発音のニュアンスも意識したもの」となる。

その上で忘れてもらっては困るのが、スネアはあくまで「裏拍担当」という「リズムセクション」であるということ。だって**マーチの核は、うるさすぎず、けれど必要な役割はしっかり果たすという、つまり存在感のあるバスドラム（頭拍担当）と、スネアの存在があって初めてできあがる**ものだから。

責任重大、決して「ただ叩けばいい」ってものではないスネアドラムだけど、「大きすぎる！」と言われたからって、なんでもかんでもミュートすれば解決するほど単純な楽器ではないんだなぁ。なのに、やたらめったら楽器にミュートしちゃってる学校のなんて多いこと（嘆）。世界中の楽器屋さんは日々「いかによい響きをもつ楽器を作る」ために苦心しながら開発をしているのに、深い考えもなく「うるさいから響きを止めとけ！」はないでしょう（大泣）。

本当にミュートが必要なときもあるけれど（たとえばドラムセットのスネアには、求めるサウンドによってはミュートが有効だったりする場合もある）、「大きすぎる」とか「発音が悪い」と言われたときは、いきなり「響きをなくす方法」（ミュートする）をとらずに、まずはその場にふさわしいサウンド（音色や、響きのニュアンス、スピード感など）に近づけるように工夫することを考えてみてほしい。

僕は音楽は「頭でするものだ」とは思わないけれど、でも頭も使わないと、特に合奏では難しい局面もあるからね。「大きい」「発音が悪い」という指示を単純に受け取らずに、「どうして大きすぎて聞こえるのか」「なぜ発音が悪いと感じさせてしまうのか」と、分析的に考えてみることも必要だよ。

もちろん絶対的に大きすぎる音はよくないけれど、逆にバチ先で皮をそっとなでるような叩き方ではまず発音が聞こえないし、当然楽器は響かない。また、周りの音が大きい中では、基本的に響きのない音は抜けてこない（聞こえてこない）から、やはり抑えすぎるのは考えもの。安易にミュートに頼り、自分だけ叩いた気になっていても、実は「バンドへの貢献度ゼロ」なんてのは罪深いしカッコ悪い。特に発音に関しては、よくないのならまずはふさわしい発音法を探すべきで、ならば、まず奏法について見直さなくては。いくら周りから「気にならなくなった」と好評を得たところで、客席に届かない音に存在価値はないし、それではマーチに核がなくなってしまう。

みんな、「これが打楽器の宿命」とあきらめて（笑）、決して隠れるんじゃなく、地道に「その部分にふさわしいサウンド」を追求して、ぜひ頼りがいのある縁の下の力持ちになってくれ！

■お次はシンバル

マーチの中でのシンバルに最も必要とされるのは、ズバリ**「明瞭な発音」**。しかもその発音は、曲に輝きのある明るい響きをもたせることができるものでなくてはならない。

なぜなら、シンバルはマーチに「マーチらしさ」とも言える彩りを加えられる唯一のパートだから。そしてそんな理想のサウンドを実現するために何より大切なのが「発音のスピード」。すなわち、決して遅れることのないように！

そして、そのマーチのテンポ感（あるいは、そこから読みとれるスピード）でしっかり楽器をぶつけ、かつその際の発音は長くなりすぎない＝シンバルの当たっている時間が長くなりすぎないように（発音の遅い「ジュワーン」という長めの発音は吹奏楽のマーチには合わない）。そう、結局ここでも追求すべきは「そこにふさわしい」サウンドなんだよね。

あとはそのサウンドが収まるべき場所に（シンバルの場合の「収まるべき場所」は、「バスドラムに寄り添う頭拍」のイメージかな）過不足ない存在感でいてくれたら言うことなし！　さぞ気持ちよく行進できるはずだ。

最後に。シンバルついでに（？）、ふだんから気になって仕方ないことをひとつ。

シンバルを*f*で叩いた直後、音楽的に自然と思える動作の中で、楽器を持つ手が大きく広がったり、一連の動作の流れの延長として結果的に（必然的に）楽器の内側が客席方向を向くのは大いにありだと思うんだけど、「最大目的は楽器の内側をお客さんに見せること！　その前にちょっと叩いてみました」みたいな光景をときどき、いや非常にしばしば見かける。シンバルって演出小道具じゃなく、「楽器」なんだよなぁ……。